

第26回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

功労賞受賞者

<氏名> 寒川 恒夫（そうがわ つねお）

<所属等> 静岡産業大学特任教授

<生年> 1947年（76歳）※年齢は、2024年3月18日時点

<学歴> 1981年 筑波大学大学院体育科学研究科博士課程修了

<学位> 学術博士（筑波大学）

<職歴> 1985年～2018年 早稲田大学教育学部専任講師、教授
（1987年～ 早稲田大学人間科学部）
2018年～ 早稲田大学スポーツ科学学術院名誉教授

<その他役職>

元 日本体育協会国民スポーツ専門委員会委員

元 文部科学省 ナショナルトレーニングセンターの在り方に関する調査
研究協力者

元 日本体育協会国際交流専門委員会委員

元 文部科学省 中学校学習指導要領（保健体育）の改善に関する調査協力者

元 日本スポーツ人類学会会長

アジアスポーツ人類学会会長

寒川恒夫氏は、国際的にトップを決める「国際（近代）スポーツ」に係る研究が多数行われる潮流の中で、永年にわたり民族や身体、遊び、武道、舞踊といった幅広い視点からスポーツを捉え、日本国内でスポーツ人類学という研究領域を開拓し定着させた。これはスポーツの多様な在り方を明らかにするものであり、現代社会のスポーツの在り方を考える上でも重要な研究であるといえる。

スポーツ人類学は、人類学とスポーツ科学を親科学としている。そのうち人類学は、生物の進化、適応等の側面から研究する自然人類学、遺物や遺跡によって人類の過去を研究する考古学、音声による人間相互の情報伝達を扱う言語学、世界の諸民族に見られる文化や社会について比較研究する文化人類学、庶民の伝承的な生活文化を対象とした民俗学等の分野から構成されている。同氏は、これらの視点から総合的にスポーツにアプローチをし続けてきたのである。

特に文化人類学では、フィールド・ワーク（実地調査）が重要とされる。フィールド・ワークは、事前に調査や観察の基本的な知識を修得し、該当論文を読み、理論モデルの討議、役割分担を行って臨む。現地では、原住民に恐怖等を抱かせないよう本当の信頼関係を構築するとともに、予期せぬ出来事に対しては、臨機応変に軌道修正を行う。そして、資料収集の後に成果報告となる幅の広い活動である。

日本のスポーツ人類学が試行錯誤の段階にあった 1970 年代、同氏はフィールド・ワークを精力的に行い、修士論文「自然民族の儀礼球戯の研究（1973 年）」、博士論文「稲作民伝承遊戯の文化史的考察（1981 年）」を完成させて、スポーツ人類学研究の質の向上に貢献した。

さらに、1988 年には、K. ブランチャードと A. チェスカ著の「The Anthropology of Sport」を翻訳し、「スポーツ人類学入門（大林太良監訳）」の発行に尽力した。同書はスポーツ人類学の発展過程における初めての入門書とされ、スポーツの本質的な理解を得るための貴重な書となっている。

その後も同氏のフィールド・ワークは継続し、「ムラと遊び」、「闘鶏と中国文化」、「遊牧民運動会観戦の記」、「ラオス・ベトナムにおける民族スポーツ調査報告」、「世界武術紀行」など数多くの成果報告をまとめ、日本体育学会（現 日本体育・スポーツ・健康学会）等で発表することで他の研究者に対しても多様なスポーツとの関りを示し、併せて同成果を活かして今日まで数多くの後進を育成している。

その他、ナショナルトレーニングセンターの在り方に関する調査研究協力者（文部科学省）、中学校学習指導要領（保健体育）の改善に関する調査協力者（文部科学省）、日本スポーツ人類学会会長、アジアスポーツ人類学会会長を務めるとともに、日本スポーツ協会（当時、日本体育協会）においては国民スポーツ専門委員会委員、国際交流専門委員会委員を長年にわたり務めるなど学会活動、社会活動にも積極的に取組んだ。

同氏は、日本においてスポーツ人類学という研究領域を確立し、多様なスポーツの捉え方を提示することでスポーツの普及・発展に大きく貢献した。

第 26 回秩父宮記念スポーツ医・科学賞

奨励賞受賞者

<氏 名> 能瀬 さやか (のせ さやか)
<所属等> 国立スポーツ科学センター契約研究員
<生 年> 1979 年 (45 歳) ※年齢は、2024 年 3 月 18 日時点
<学 歴> 2003 年 北里大学医学部卒業
<学 位> 医学博士 (富山大学)
<職 歴> 2004 年～2006 年 同愛記念病院研修医
2006 年～2012 年 東京大学医学部産婦人科学教室入局
東京大学医学部附属病院産婦人科
総合母子健康センター愛育病院、焼津市立総合病院
東京日立病院、八戸クリニック産婦人科
2012 年～2017 年 国立スポーツ科学センターメディカルセンター
2017 年～2023 年 東京大学医学部附属病院女性診療科・産科
国立スポーツ科学センター婦人科非常勤
2023 年 4 月～ 国立スポーツ科学センター契約研究員

<その他役職>

日本パラリンピック委員会女性スポーツ委員会委員長
日本パラスポーツ協会理事
日本スポーツ協会女性スポーツ委員会委員
一般社団女性アスリート健康支援委員会理事

能瀬さやか氏は、2012年から国立スポーツ科学センタースポーツクリニック女性外来を担当、2017年には国立大学として初の東京大学医学部附属病院女性診療科「女性アスリート外来」を立ち上げ、女性アスリート特有の健康問題に対し障害予防やコンディショニングの点から、スポーツに参加する女性が健康で競技生活を長く送ることが出来るよう多くの女性アスリートの診療を行ってきた。

同氏の女性アスリートの三主徴（利用可能エネルギー不足、視床下部性無月経、骨粗鬆症）の研究、OC・LEP（低用量ピル）に関する調査研究、妊娠期・産後に関する研究において、これらの業績が高く評価され日本産科婦人科学会で2019年度学術奨励賞を受賞した。

女性アスリートの三主徴について海外では多く報告されているが、日本人女性を対象としたデータは少ない現状にあった。スポーツ庁委託事業女性アスリートの育成・支援プロジェクト「女性アスリートの戦略的強化に向けた調査研究」で女性アスリートの三主徴の頻度について大規模な調査を実施し、無月経の頻度について競技特性別や大会のレベルに分け調査を行い、競技レベルを問わず取り組むべき課題であることを明らかにした。

また、女性アスリートの三主徴と疲労骨折の関連についても調査した結果、三主徴を有するアスリートは疲労骨折のリスクが高い結果となった。これらの調査から日本人女性アスリートにおける三主徴の現状、低骨量の関係因子及び治療についての調査結果によりジュニア期からのスクリーニング体制の構築が課題であり、女性アスリートのみならず女性のヘルスケアにも応用できる結果であり、今後、女性全体の予防医学に活用されることを期待することからその予防や治療の研究に取り組んできた。

これらの成果を国内外の学会（主演者のみ：海外2 国内84）に発表し、数多くの報告書や研究論文（主著のみ：英文11 和文58）として公開してきた。

また、これらの研究を基に診療のためのガイドラインを作成し、産婦人科医に向けた講習会を開催し普及、啓発を行うとともに、アスリートや指導者、教育関係者や保護者向けに動画や啓発資料を数多く作成し、アスリートを支える方々へのサポートや情報提供を行っている。

同氏は日本スポーツ協会においても女性スポーツ委員会委員や国民スポーツ大会委員会医事部会委員、スポーツ少年団や公認スポーツ指導者制度におけるスポーツドクター養成講習会での講師を務めるなど活躍をしている。

また、日本パラリンピック委員会女性スポーツ委員会委員長に就任し、パラスポーツの女性アスリート支援システムを構築し、パラアスリートに対するサポートも行っている。

同氏のこれまでの女性スポーツサポートに係る功績と今後の更なる発展を期待して奨励賞を授与する。

第26回秩父宮記念スポーツ医・科学賞 奨励賞受賞者

<グループ名> 順天堂大学女性スポーツ研究センター
<代表者> 小笠原悦子氏

2011年に文部科学省委託事業である『チーム「ニッポン」マルチサポート事業（女性アスリート戦略的強化支援方策の調査研究）』を受託し、その調査研究の報告書として2013年に「女性アスリート戦略的強化支援方策レポート」を作成、その研究活動を基盤に2014年に順天堂大学に女性スポーツ研究センター（Japanese center for Research on Women in Sport）が開設され、国内初の女性スポーツの研究・支援拠点を設置した。

同センターは、「女性アスリートのコンディショニング」に関する研究活動の更なる推進、「女性リーダーの育成」と「スポーツ参加促進」の方策提案、女児から高齢女性まですべての年代を対象とした「健康増進とパフォーマンス向上」に寄与する研究活動の実施という3つを目指し、常に新たなテーマへの挑戦と数多くの研究を行い、その成果を発表している。

また、2014年には、順天堂大学医学部附属順天堂医院および浦安病院の2カ所で、女性アスリートが健康で長期的に高い競技力を継続できるよう医学的側面から総合的に支援する日本初の女性アスリート外来を開設した。

医学とスポーツの研究・実践に長年取り組み、着実に実績を挙げ、コンディション管理に役立つ女性アスリートダイアリー、オンラインヘルスチェックツールであるPPE for female athletes、女性アスリートが陥りやすい3主徴であるFAT（Female Athlete Triad）のスクリーニングシート等プロダクトの作成、女性リーダー・コーチアカデミーの開催や、女性アスリートに対する研修等の啓発活動を積極的に実施した。

そして、女性アスリートが直面しやすい、身体的・生理的な課題、心理・社会的な課題、組織・環境的な課題を解決し、女性スポーツ研究センターが目指す3つの果たすべき使命の実現には、女性指導者育成が重要であり、ロールモデルを増やす必要があると考えた。NCAA（全米大学競技スポーツ協会）の女性コーチ育成システムに着目し、日本向けにアレンジした「女性リーダー・コーチアカデミー」を開催している。

このアカデミーでは、指導者に必要な内容を集約し、コンディショニングに関するプログラムにおいては女性アスリートの三主徴やスポーツ栄養の正確な知識を、リーダーシップに関する講義では、人を導く理論と実践を学び、近年スポーツ界で注目されているLGBTQに関するテーマも取り上げるなど指導者としてハイレベルな内容を提供している。現在、修了生は275名となり、それぞれのフィールドで活躍している。

このように、女性アスリートへの科学的サポートに関する視点が国内では未成熟な中で、同センターが行ってきた活動は、研究成果をもとに研修会や講習会・講演会において知見を提供し、競技力向上のみならず、女性とスポーツの在り方への洞察や男女共同参画にも好影響を与えており、これまでの功績と今後の更なる発展を期待して奨励賞を授与する。